



STORY FRAGMENT

「その、わりとつがなく進んだ七種族会議の中で、一つだけうまく折り合いがつかなかつた問題があつたんです」  
「アリアはよりシアースな顔になり、「それが、『工口本』問題」  
なん……なんだろう、この、本人の真剣すぎる表情と、口から放たれた言葉の大いなるギャップは。

「馬鹿野郎……！」わかった戦おう。ただし君を殺す為じやない。僕の剣で君の心と僕の心つまりシーチキン巻きと納豆巻きがまた一緒につまる日をつくる為に、僕は戦う！」

「ますい……身体が動かん。手が手が勝手に、雑誌を、棚に置こうとしてる……」「そんな……悔しい。私達の……」

「新参だらうが関係ねえ。やり方を選ぶのがオレ流だ。向こうのパートを一番打つのは、ここ……この世界の魂、デモン・イレブンなんだよ。絶対間違ひねえ！」

デモン・イレブンを待ち受けるのは、おかしな異世界の住人と、コンビ二ならではの厄介な諸問題……。

ごく普通のファンタジー世界が、ごく普通のコンビニと出会い、全てをひっくり返すような大変革を迎える、これはコンビニに行つたことのある全ての人贈る、異世界ファンタジーでお仕事なコメディ小説なのです。

「ハメられた！ あいつらはなつからあたし達を生かして返す気なんてなかったんだ！」

「さあ面接官どもよ！ 私に告げよ！ 大なる福音を！ “英雄王” リチャード・ルフェイン三世を……このコンビニで働かせると！ ウハハハハハハ！」

「この生き辛い世の中でも、そういう幸せを演出するための大切な飲み物。それがコーヒーだと……、それに一番相性が良いのが、チョコチップクッキーだと……、何故わからない勇者よ……」

その光景に、オレは、たぶん店長代理が思っていた以上に感銘を受けていた。  
(そうだ……まだ、諦めるのは早いよ！)

「オレはブレッシャーを振り払つて、必死に頭を動かせる。この二ワトリ(?)に、こだわりたまごのふわふわオムライスを売つていいのか、閉鎖がイヤなら、必死に無い知恵絞つて考えるんだ。